

本号の特集は“病院と医師の修練”である。

ながらく論議されていたインターン制度の廃止が国会で成立し、医学部卒業者はただちに国家試験を受けて医師資格が得られるようになり、医師になったものは、さらに2年間臨床研修を受けるよう努めなければならないと定められた。新制度による国家試験は6月に行なわれ、引き続き新しい臨床研修が始められることになるので、この特集は誠に時宜に適した企画のように見える。

しかし、本誌の原稿は発行の3か月以上も前に集められたので、各論文は、この医師養成制度がどのような決定をみるか、全く混沌として判らなかった時期に計画され執筆されたものである。したがって、執筆者にとっては、むしろ意見などが書きづらい時期ではなかったかと、申し訳ない。

こうした関係で、守屋教授の総論をのぞき、過去の経験を主として集めた。

すなわち、外国での卒業後修練の経験に加え、それが有効に行なわれてきたと思われる2、3の病院について計画担当をされた先生と実際にそこで修練を受けた先生とに、諸経

験を報告していただいた。

アメリカで卒業後教育を受けてきた五十嵐氏が述べているように、沢山の医師から沢山の症例について実地の教育を受ける機会をもつアメリカのインターンやレジデントは、ちょうど守屋教授の主張が実現しているようなもので興味深い。インターンとレジデントの1年目はアメリカでもslave labourと呼ばれるといい、その修練のきびしさは、わが国でもこれから十分参考にすべきであろう。ドイツ、フランスの報告をみても同様で、かなりの競争ときびしさがあるようである。

この点、立派な修練の成果をあげてきている虎の門病院、聖路加病院でも同じようにいえる。女子医大の医療練士コースにはいった後町氏もこの厳しさを自分に続けていけるかどうか不安に思ったと述べている。これまでのインターン制度の失敗は、それが余りにもルーズに行なわれてきたためではあるまいか。

浅井氏が書かれたように、将来どの科を選ぶにせよ、広い知識と経験を持つことが望ましいとは、多くの識者が持つところである。ドイツでも、卒業約2年の修練のうち、最初の1年は内科6か月、外科4か月、

産科・婦人科4か月が必須であると、上野氏は報告している。今後の修練制度にも、この点は十分配慮してほしい所である。

また、浅井氏が指摘されたように、期限のきまった定数の修練生が毎年はいってくることは、病院医局の新陳代謝を促進し、その老化を防ぐことになる。こうしてアメリカの例でもわかるように、修練病院になることは、病院にとって望ましいことなのである。

この点の認識を強め、これからの研修病院制度を、わが国医療制度全般の改善の礎石としたいものである。

上野氏が述べたように、卒業後修練の問題は、医学教育全般および専門医制度などを一貫させて考えなければならないが、本誌でも、今後、これらの問題もとり上げてゆきたい。この意味で、中山教授が榊原教授などと協力し女子医大で始められた医療練士研修制度は、大変貴重なものであり、今後の成果を期待したい。

なお、今後の研修病院の実際については、近号に座談会で取り扱う予定になっている。

(前頁より) 的で93%を占める。10代ボランティアの作業内容は、①メッセンジャー、②送り迎え、③小児患者の相手、④花の手入れ、⑤書類作成、⑥レクリエーション、⑦中央材料室、⑧病歴室、⑨コーヒーショップのウェイトレス、とっている。また興味深いことは前述の、

病院勤務者への道、進路相談計画をもつ病院に、10代ボランティア活動が盛んなことである。

病院の規模との関係では、大規模病院にやや多いが、100床以下病院でも46%にボランティア活動がみられる。

経営主体別には、個人立病院に少

ないのは想像がつくが、特に政府立病院でボランティア活動が盛んであり、病院側もボランティア部を作って、責任者を病院側で用意している事実は、お役所的雰囲気を減少させる意味でわが国にも参考となる点が多いのではあるまいか。

紀伊国献三(病院管理研究所)

病院=第27巻・第6号

特集=病院と医師の修練

定価420円 医学書院刊

(担当=乾・佐藤・上箱)

病 院・1968年6月